
時計じかけの華撃團

ともゆき

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

時計じかけの華撃團

【Nコード】

N6727A

【作者名】

ともゆき

【あらすじ】

紅蘭の元にかかる謎の電話。そしてそれは帝都・東京を震撼させる連続爆破事件の始まりだった…。

ブローグ〜太正12年4月4日〜

「帝國海軍 大神一郎少尉殿

一、貴殿ニ特殊任務トシテ
以下ノ部隊隊長ヘノ
着任ヲ命ズル

帝國華撃團

降魔迎撃部隊 花組

一、尚本任務ハ帝都守備ノ為ノ
機密任務デアル
部隊トノ合流ノ為
上野公園ニ向カハレタシ

帝國陸軍中将

米田一基

*

太正十二年四月四日、浅草・帝國華撃團花やしき支部。

「紅蘭、おはよう」

「あ、あやめはん。おはようございます」

支部内の職員食堂。李紅蘭と藤枝あやめが挨拶を交わす。何の変わりもないいつものどおりの朝である。

紅蘭は既に朝食を済ませ、『帝都日報』と書かれた新聞を読んでいた。あやめは朝食を持ってくるとその向かい側に座る。

「…そう言えば今日ね」

「何がですか？」

「大帝國劇場の方に花組の隊長となる人が来るのよ」

「へえ、今日でおますか。…一体どんな人なんやろ？」

「私も書類を見たただけだからよくわからないんだけど…。何でも海軍士官学校を卒業したての人だそうよ。花小路伯爵の強力な推薦があつたんですって」

「海軍ですか、面白そうやな。ウチ早く会つてみたいわ」

「でもあなたと私は今月いっぱい花やしき支部にいる約束だからね。早くても来月になっちゃうわよ」

「わかつてます。…ところでな、あやめはん」

「なあに？」

「ウチ、これ挑戦してみたいんやけど…。よろしゅうおますか？」

紅蘭があやめの目の前に帝都日報の中のある記事を差し出した。

「発明コンテスト 賞金一千元」との記事があつた。

その記事は帝都日報社の主催で発明のアイデアを募集し、すぐれた発明には一等賞金として千円が渡される、との内容だった。締切は三カ月後の太正十二年七月末日、八月下旬に発表があり、九月中旬に帝都日報社で授賞式が行なわれる、との内容だった。

優秀な発明品は来年フランスはパリで行なわれる第八回オリムピックにあわせて開催される展覧会に出品される計画もあるという。

「…成程、紅蘭らしいわね。やっぱり紅蘭も千円が魅力的なのかしら？」

記事にざっと目を通したあやめが言う。

「それもあるけどウチ、自分の力がどれくらいあるのか試してみたいんですわ。こういった機会は大いに利用せんとな」

「わかつたわ。あなたの好きなようにやってみなさい」

「ありがとうございます！」

「ただし、帝國華撃團としての仕事はおろそかにしないのよ」

「それもわかつてます、って」

*

それと同じ頃、上野公園。

大神は上野公園の桜並木の中を歩いていた。

ここで帝國華撃團からの使いの人物が来ているので合流せよ、との話だが…。

「…そういえばこの前、怪物騒ぎがあったのこの辺だったよなあ。

何でも、その怪物を一刀で切り伏せたのが、若い女の子だったとか…」

その時の爆発で出来たのであろう、地面がえぐられて出来た大きな穴が、その時のことを物語っているようだ。と、

「あの…、大神一郎少尉ですか？」

一人の少女が話しかけてきた。

*

その後、紅蘭とあやめの帝劇への転属が正式に決定し、その準備やら何やらで忙しい毎日が続き、紅蘭がようやく発明コンテストへの準備に取り掛かれたのは帝劇にやってきた五月からだだった。しかし紅蘭は一度アイディアがまとまるとそれから早いのだ。五月の終わりには既に試作品が完成。帝劇のまわりのみんなからの意見を取り入れ、最終型が完成したのが六月の半ば。内容説明の書類をまとめ、帝都日報社へ発明品ごと発送したのが六月の終わり、とたった二カ月でここまでまとめあげた。あとは結果待ちとなるが、その結果が出るのは二カ月近く後のことである。

少し余裕を持つとあれをやればよかった、ここをこうすればよかったと反省点が必ず出てくるものだが、もう送ってしまったものは仕方がない。やれるだけのことはやったのだ、例え落選したとしても悔いの残らないようにしなければならぬ。

それに紅蘭も華撃團としての仕事もあつたし、普段は女優として舞台にも拳がついている。発明コンテストの結果も確かに気になるが、そっちの方はかりにも気を取られてはいられない。

紅蘭が本来の、帝國華撃團および帝國歌劇團の仕事に忙殺されて

いるうち、季節はいつの間にか盛夏を過ぎて8月の下旬となり、夏が終わる頃としていた。

第1話 太正12年8月24日

外は雨が降っていた。

何でも西日本のほうで台風が近づいている、と言う話で、この雨は大雨となり、明日の朝までかなりの量が降るだろう、という予報が出ているという話だった。

そんな中でも、帝劇の舞台上ではいつも通り花組の面々が稽古をしていた。と、

「紅蘭、電話よ」

榊原由里が紅蘭を呼んだ。

「ウチに電話？ 一体誰や？」

「それが名前を名乗らないで、『紅蘭を出せ』の一点張りなのよ…」

「…何や、それ。気味悪いなあ…」

紅蘭はぶつくさ言いながら、舞台を降りていった。

舞台から事務局へ行く間、何気なく窓の外を見る紅蘭。

「…大雨になってきたなあ…」

そう、稽古を始める事にはそれほどの量でもなかった雨も本格的な大降りとなっていたのだった。

そして紅蘭は、事務局に入ると電話機の傍らにおいてある電話を取った。

「もしもし」

「…李紅蘭だな」

受話器の向こうで何かくぐもったような声がした。

「そっやけど…、あんた誰や？」

「…そんな事どうでもいいだろう？ …紅蘭、どうだ？ ひとつ勝負をしないか？」

「勝負やて？」

「ああ。聞いた話だと、お前も例の発明コンテスト、応募したらしいな」

「それがどうかしたんか？ そんな事どうだってええやる？」

「まあ、いい、要はオレの発明とお前の発明、どっちが優れているか勝負をしたいんだ」

「…勝負、つて…、あんたもあのコンテストに応募した、いうことか？ だったらそっちでウチとあんたの発明品、どっちが優れているかわかりそうなものやる？ 大体、ウチ、そんな見ず知らずの人と発明勝負なんかやる気、あらへんで」

「…そうか、まあいい。明日、日本橋で面白いものを見せてやるぜ」「面白いもの？」

「明日になればわかることだ。それを見ればあんたが勝負をやる気になるかもしれないな」

「…あんた、誰や？ ただの悪ふざけだったら承知せえへんで」

電話が一方向的に切れた。

「…なんやねん、一体…」

紅蘭はぶつくさ言いながら電話を切った。

「…何だったの、紅蘭」

「ああ、気にしなくてええで。ただのイタズラ電話や」

紅蘭は心のどこかで引つかかるものを感じながらも稽古に戻っていった。

*

丁度稽古が終わり、紅蘭たちが自室に戻ろうとしていた頃だった。

「…いやあ、酷い雨だったなあ」

そう言いながら大神一郎が帝劇に戻ってきた。

「お帰りなさい、大神さん」

由里が大神を出迎える。

「ごめんなさい、大神さん。こんな時にお使いなんか頼んだりして」

「いやいや、どうってことないよ」

「…それよりびしょ濡れじゃないですか」

由里が指摘したとおり、大神が持っていた傘も、着ていた服もびしょ濡れである。

「…そのようだね。そういえば日本橋を取った時、川もかなり水かさを増していたよ。この分だと明日の朝はかなりの水かさになるだろうな」

「そうですか…。あ、お洗濯をしておきますから、大神さんはシャワーでも浴びてきたらどうですか？」

「そうするよ」

そういつと大神は地下へと降りていった。

「…そうや、大神はんだけには言っておくか…」

*

そして大神がシャワーを浴びて自分の部屋に戻った頃を見計らって紅蘭は、

「…大神はん、おるか？」

と、大神の部屋のドアをノックする。

「…紅蘭かい？ ドアは開いてるよ」

「ほな、失礼します」

そういつと紅蘭は大神の部屋に入った。

「…どうしたんだい、紅蘭？」

既に服を着替えた大神が手拭いで髪を拭いていた。

「いや、ちよつと大神はんに聞いて欲しいことがあるんや」

「聞いてほしい事？ なんだい？」

「いや、実はな…」

そして紅蘭は大神にさっきの電話のやり取りについて話した。

「…というわけなんや」

「…うーん…」

そういつと大神は黙り込んでしまった。

「ただの悪戯にしては悪質だな…」

「…ウチもそれが気になつてな…」

「…どうする？ あやめさんにでも相談するか？」

「いや、みんなに話すのは一寸待つててや」

「待つてろ、つて…。その電話の相手、つてのは日本橋で何かをやる、つて言つてゐるんだろ？ だつたら、あやめさんや米田中将にお願ひして何らかの手を打つてもらわないと…」

「…それはそうなんやけど、まだ悪戯かどうかもわからんし…。大体なんでウチにそんな電話をかけたのかがわからないんや」

「うーん。…確かにそれは気になるな」

「とにかく、みんなに話すのはちよつと待つてくれへんか？」

「…わかつたよ」

*

翌日の朝早くのことだつた。

結局夜遅くまで大神と話し込んでしまつた紅蘭が自分の部屋のベッドに入ったのは既に夜中の1時を回つたときだつた。

「う…ううん…」

ベッドの中から大きく伸びをする紅蘭。

雨はいくらか勢いは弱まつたものの、いまだに降り続けている。そのときだつた。

ドッカーン！

いきなり大きな爆発音がし、窓ガラスががたがたと揺れた。

「…な、なんやあ！」

その音に驚いて思わず起きだした紅蘭。

紅蘭は慌てて枕元にある眼鏡をかけると窓の外を見る。

「…！」

外の光景を見て思わず絶句する紅蘭。

どこからか煙が立ち上つていたのだつた。

紅蘭は着替えもそこそこに傘も差さずに通りに飛び出していた。

「あ…、大神はん」

紅蘭はそこに大神の姿を見つけた。

「…大神はんも気がついたんか？」

「ああ、なにやら爆発音がしたんでね。それにしても…」

大神は爆発音のした方角を見ていた。

「…大神はん、あそこは…」

「ああ、どうやら日本橋の方角だな。行ってみよう！」

「ほいな！」

そして二人はその方向に向かって走り出した。

*

「…だいぶ増えてきたな…」

大神が川を見て呟いた。

そう、その水かさは大神が昨日の昼に見たときより、少なくとも見て

も20^{センチ}程近く増えていたのだった。

そしてその流れもかなり急である。

日本橋には既に大勢の野次馬が集まっていた。

そしてその傍らには警察の車が何台も停まっていた。

よく見ると陸軍のトラックも停まっている。

「…なんでこんなところに陸軍が…」

大神が呟く。

「とにかく大神はん、行ってみようで！」

紅蘭が言う。

「あ、ああ」

「…ほい、ちょっとゴメンな」

そう言いながら紅蘭と大神は中に入っていた。

「…！」

それを見た瞬間、大神と紅蘭は絶句してしまった。

日本橋の橋げたの一部が爆弾か何かで吹っ飛ばされていたのだっ

た。

現場周辺には縄が張られ「立入禁止」の札がぶら下がっており、何人も警官がそこに立ち、出入りの規制をしていた。

「…一体どうしたんですか？」

大神は傍らにいた軍人に聞いた。

「…あなたは？」

「…自分は大神一郎少尉です」

「大神：？ あ、もしかして帝國華撃團の大神少尉でありますか？」

「…そうだけど？」

「これはこれは失礼しました。大神少尉の話は聞いておりますよ。

「いや、なんでも今朝方何か爆発が起きたらしいんですよ」

「爆発？」

「はい。朝早かったこともあって、人的被害はなかったようなんです。それでもあれだけの威力ですからねえ。もしこれが昼にでも爆発していた、と想像すると恐ろしいですね」

まあ、確かに吹っ飛んだ橋げたを見ると、その威力が想像できると言っものだが。

「…あ、そう言えば、調べてみるとなにやら爆発物らしきものが見つかったそうなんですよ」

「爆発物？」

「一応陸軍の爆発物処理班に今から持つて行って調べる予定ですが…」

「…よかったら見せてくれないか？」

「…ちよつと上官に相談してみます」

「頼むよ」

*

それから暫くしてその軍人がなにやら持つてきていた。

「何でも、先ほど下流の方でこんなものが見つかった、と言う報告があつたんですよ」

そういいながら、その軍人は大神に何かを差し出した。なにやら鉄の棒のようなものだったのだ。

「…あ、警察にも後で提出するので扱いには気をつけてくださいね」

「あ、すみません」

そういうと大神はポケットから手ぬぐいを取り出して、その鉄棒をくるんだ。

紅蘭が横から覗き込む。

「これは…」

大神が呟いた。

「…それと、その鉄棒が見つかった近くでこんなものが見つかったらしいんですがね」

そういいながらもうひとつ差し出した

しかもそれはおかしなことにゴムか何かで出来たような輪のかけらのようなものだったのだ。

「…なんだ、これは？」

「…ちよつとよく見せてや」

そういうと紅蘭は大神の手からひったくるようにそれを奪うとまじまじと見る。

「…いつたい、なんやろ…？」

そう言いながら、紅蘭はゴムの輪を眺めていた。と、

「…ん？ なんや、これ？」

ゴムの輪のかけらに何か付いていたのだ。

紅蘭はそれをじつと眺める。

「…どうしたんだい？」

大神が聞いた。

「…これ、鉄か何かの金属やな」

「金属だって？」

「…なんでこんなもんが付いてるんやろ…」

*

「日本橋の橋桁が何者かによって爆破された」と言う話はあるとい

う間に広まり、紅蘭愛読の帝都日報が号外を出すまでの騒ぎになった。

「爆発物らしきものが見つかった」という事で何者かが橋桁に爆弾を仕掛けた、と言うことはわかったのだが、それ以上のことはわからなかった。

そんな中、紅蘭は引つかかるものを感じていた。昨日自分の元にかかってきた謎の電話である。

もしあれが犯行予告だとしたら、犯人は何故自分にあんな電話をかけてきたのか？ 一体犯人の目的はなんなのか？ 何もかもわからないことだらけである。

「…ふうっ…」

紅蘭は喉の渴きを覚えると台所へと向かっていった。

台所の水差しを取ると、コップの中に水をいれ、それを飲み干す。そのときだった。

「…！」

紅蘭の頭の中にあるひらめきが走ったのだった。

そして空になったコップをまじまじと眺める。

「…そうか…、こういうことやったんや…」

*

「大神はん、ちょっとええか？」

紅蘭が大神を呼び止めた。

「どうしたんだい、紅蘭？」

「大神はんに見せたいものがあるんや。ちょっと来てもらえますか？」

「…ああ、わかった」

大神が紅蘭の部屋に入ると、そこには机の上に水槽となにやら機械が置いてあった。

その中によく見ると何か棒の様なものにゴムが何かで輪っかが嵌まっており、両方に線が繋がっており、水槽の上には電球が付いていた。

その傍らには水が入ったバケツが置いてあった。

「…一体なんだい、これは？」

「…ウチが考えた今回の爆破事件のトリックや」

「トリックだつて？」

「まずこれを見てや」

そう言いながら紅蘭は水槽の中からゴムの輪っかが付いた鉄棒を取り出した。

奇妙な事にその鉄棒は両端に鉄板が溶接してあり、その片方には1本の電線らしきものが繋がっていた。

そしてその中を通っているゴムの輪も、片方に鉄板がくっついており、その鉄板からは同じように電線が取りつけてあった。

「…それは？」

「今回のトリックを成立させるために重要な小道具や。まず、一番最初にこのゴムの輪の片側に鉄板をくっ付けておくんや。で、そのゴムの輪を鉄棒に通した後にゴムが抜けないように鉄棒の両端に鉄板をとりつけるんや。で、次に鉄棒の片方とゴムに取り付けた鉄板に電線をつなげておくんや。この時に注意して欲しいのは、その線をつなげた鉄板同士が接触するようにしておくことやな」

そして紅蘭はゴムの輪を鉄棒に通した。紅蘭の言うとおり、鉄板同士が接触している。

「…そしてこの2本の起爆装置につなげておいて、水槽の中に入れるんや。このとき注意して欲しいのは電線の付いたほうを上にして鉄棒を入れておくや」

そう言うつと紅蘭はその鉄棒を水槽の中に入れた。

「…今、ゴムの輪は水槽の下にあるわな」

確かに紅蘭の言うとおり、現在はゴムの輪は下にあり、電線のついた鉄板同士は接触してない。

「ここから先が重要や。よく見ててや」

そういうと紅蘭はバケツの水を水槽に少しずつ入れていく。

水槽の水がゆっくりと溜まっていく。

「大神はん、この棒をよく見ててや！」

そして棒に嵌まってあつたゴム状の輪が水面上の鉄棒の輪に接触したときだった。

水槽の上の電球が点灯した。

「…これは…」

「そうや、これがウチの考えた日本橋の事件のトリックや」

「…そうか、そういうことだったのか…」

大神は紅蘭の言おうとしている事を理解したようだった。

「…どうやらわかったようやな。最初、水が入っていないときはゴム自体の重さで輪っかは底にある。つまり、鉄棒の上についている電線とゴムについている線は離れているということやな。でも、水を入れることで、ゴムには浮力があるから、ゴムは水の上に浮く。やがてゴムの輪っかに付いている鉄板と鉄棒に付けた鉄板が接触することで電気が通り、電球が点いた、とこういうわけや。電球を爆弾に替えれば立派な爆弾になるで。勿論、水は電気を通すから前もつて電線には絶縁措置を施しておかなあかんけどな」

「…それで？」

「…大神はん、昨日『川の水かさが増えていた』言うとなつたよな？」

犯人は昨日、それを利用してこの仕掛けを作ったと思うんや。勿論、そんなに深くする必要はないで。犯人にとっては少しでも水かさが増えればええんやからな。ただ…」

「ただ？」

「…なんで犯人がこんなことしたのかわからないんや。これくらいトリックやつたら、ウチに限らずちよつと電気の知識のあるモンやつたらすぐに思いつく。それに、あの電話の目的もわからんわ。」

犯人は一体何が目的でウチに電話したり、あんな風に日本橋の橋桁を爆弾使つて吹っ飛ばしたのか、わからんわ…」

「とにかく、調べてみる必要があるそうだな」
「ウチもそう思っわ」

(第2話に続く)

第2話 太正12年8月26日

日本橋の橋桁が爆破されたその日から警察は周辺の聞き込み捜査をはじめ、帝劇にも刑事が聞き込みにやってきた。

しかし、事件の発生が早朝だった、と言うことと前日に雨が降っていた、と言うことが災いしてか、有力な目撃証言はなく、手がかりも見つかっていない、と言うことだった。

夜、帝劇の食堂。

その片隅のテーブルに大神が座っていた。

「大神はん、待たせたな」

「あ、ありがとう」

紅蘭が珈琲の入ったカップを2つ持ってくるのとひとつを大神の前に置き、自分は大神の向かいに座った。

普段は一般客に解放される食堂も営業時間が終わった、と言うこともあつてか、食堂には二人しかいなかった。

「大神はん、どう思う？」

「…うーん…、そもそもなんで紅蘭に予告電話をかけてからあんな事をしたのかわからないんだよなあ」

そういうと大神は黙り込んでしまった。

「…もしかして…」

「？ ……どうしたんや、大神はん」

「ん？ あ、いや、なんでもないよ」

そのときだった。

どこからか電話のベルの音が聞こえた。

「電話だ」

「…ああ、そうか。かすみはんたち、もう帰ってたんや。…ちょっと待っててや」

そう言うと紅蘭は食堂から事務局まで歩いていく。

*

事務局。紅蘭が電話を取る。

「はい、大帝國劇場です」

「…紅蘭だな」

その声を聞いた紅蘭の顔色が変わる。

「…あんた…」

そう、電話の向こうの声は紅蘭にあの爆破予告とも思える電話をしてきた人物の声だったのだ。

「…どうだい、紅蘭、今朝の爆発は見たかい？」

「見たも何も、あんた一体何のつもりや！」

「何のつもり？」

「あんた、どう思うとるのかウチは知らんけど、アレは立派な犯罪やで！」

「お前が悪いんだからな」

「…ウチは何も悪いことはしとらへん。あんたの脅しなんかに乗るようなウチではないわ」

「まあいい。…次は浅草だ」

「え？」

「近いうちに、浅草で何かが起こるぜ」

そういうと電話が切れてしまった。

「ちよ、ちよつとあんた…」

「…どうした？」

いつの間にか大神が事務局の扉に立っていた。

「…大神はん…」

「大声が聞こえてきたんでね。何かと思っけてきてみたんだけど」

「…アイツや」

「アイツ、つて…」

「昨日、あの爆破予告をかけてきたヤツや」

「そうか…」

それを聞いた大神は状況を理解したようだった。

「…それで、なんて言ってたんだ？」

「次は浅草だ、って言ってたわ」

「…浅草だって？」

「確かにそう言っとったわ。…どう思う大神はん？」

「うーん…。一口に浅草と言っても浅草寺に花やしき、十二階と色々場所があるからねえ…。その、電話の相手がどこを狙っているのかわからない分、こっちもどうしようもないよなあ」

「…やっぱり、警察に連絡した方がいいかもしれないな」

「…」

大神の言葉に紅蘭は黙ったままだった。

「…どうした？ やっぱり反対なのか？」

「え？ あ、い、いや…。こうなったら仕方ないわ。大神はんに任せるわ」

「そうか。…まあ、とにかく。明日浅草に行ってみようか。それから警察に行って事情を話してみようよ」

「…そうやな」

*

そして翌日、大神と紅蘭は浅草へと出かけた。

といつても普段と変わっているところはなく、浅草寺も花やしきもいつもどおりに賑わいを見せている。

この近くに「浅草六区」と呼ばれる見世物小屋が多く立ち並んでいるな所もあるのだが、そこもまた多くの人通りだった。

そして大神と紅蘭は「十二階」と呼ばれる凌雲閣に昇った。

まだまだ高層建築物が無かった太正時代にこれだけの高さを誇る建築物と言うのは遠くからでもよく目立っていたようで、その日も大勢の見物客がその中にいた。

そして展望台に昇った二人はそこから浅草を見下ろした。

すぐそばには紅蘭がかつてあやめと共にいた帝撃の花やしき支部（勿論それが花やしきのどこにあるかは一般人には秘密となってい

るが)がある浅草花やしきがある。

「折角やから花やしきでも見てみよか」

そう言いながら紅蘭が備え付けの望遠鏡に近づくが、その望遠鏡がまるで明後日の方向を向いていた。

「…どうしたんや?」

よく見てみると、それには「故障中」の張り紙がしてあった。

「…なんや故障中か」

そういうと紅蘭は近くにあった別の望遠鏡に移った。

そして紅蘭は望遠鏡から花やしきを覗く。

「…何か見えるかい?」

傍らで大神が聞いた。

「いや、相変わらずやな」

「…とにかく、気をつけるといつてもこの辺は色々な建物があるからな。それこそひとつひとつしらみつぶしに当たっていったらキリがないし…」

「…一体何が目的なんやろ」

*

そして二人はその足で浅草署へと向かった。

こういうときは大神も「自分は海軍少尉の大神一郎だ」と身分を明かし、面会を申し込むものだが。

浅草署のある応接室。

二人の刑事と大神、紅蘭がそれぞれ向かい合っている。

大神たちはこれまでのやり取りを簡潔に刑事に話した。

「…お話はよくわかりました。しかしですなあ。その、紅蘭さんに電話をかけてきた相手と言うのが誰だかわからない以上、こつちも手の打ちようがないですなあ」

「…でも、その相手は次は浅草の何処かを狙う、見たいな事を言ってるんですよ」

「その点はご心配なく。我々も警備はしておくので。また何かあったら連絡しますよ」

そして浅草署を出る二人。

「…どうする？ 花やしき支部に寄ろうか？」

「いや、とりあえず警察に言っておいたから大丈夫やる。どうしてももの時には行かなアカンかもしれんけど、今はええわ」

「そうか…」

そして大神と紅蘭は帝劇に戻った。

その夜も大神と紅蘭は夜遅くまで色々と話し合ったのだが、結局結論は出ずじまいで、また明日浅草に行ってみよう、という事で話がまとまりそのまま寝てしまった。

*

次の日、帝都・東京は晴天に恵まれ、青空が広がっていた。

そして朝9時を回って間もなくの頃、事務局に一本の電話が入ってきた。

「はい、大帝國劇場です」

由里が電話をとる。

「…はい、はい、わかりました、少々お待ちください」

由里は事務局を出ると、二階に上がり、あやめの部屋をノックする。

「どうぞ、ドアは開いてるわよ」

中から声がした。

由里はドアを開けると、

「あやめさん、浅草花やしき支部から電話です」

あやめは花やしき支部の支部長も兼ねているのだ。

「花やしき支部から？」

「はい。でも、何だか先方が何だか慌てている様子なんです…」

「慌てている？ 何だか穏やかじゃないわね」

そう言つとあやめは由里と共に下におりた。

「…はい、お電話変わりました。藤枝です」
花やしき支部からの電話を受けたあやめの顔があつという間に変わつていった。

「…何ですつて？ わかつたわ、大至急園内のお客様と周辺住民の避難誘導をして。それから花組も今からそちらに応援に向かわせるわ」

あやめは電話を切ると、

「由里、至急花組のみんなを米田支配人室に集めて！」

「どうしたんですか、あやめさん？」

「…花やしき支部の側にある浅草凌雲閣が、何者かの手によって爆破されたらしいわ」

「何ですつて？」

「今から花組のみんなを応援に向かわせるわ。それから由里はかすみたちと一緒に情報収集をお願い。急いで！」

「わかりました！」

そして由里は事務局を出て行つた。

*

その後、米田から正式に出動命令が下り、花組の一同とあやめの八人は花やしきがある浅草へと向かつた。

浅草に着いた花組は大神の指示のもと、花やしき支部の職員達の応援に向かつていった。

そして現場近くに大神とあやめの二人が来た。

「こいつはひでえ…」

大神は凌雲閣を見上げて言う。

「思ったより酷いわね…」

あやめも言う。

そう、展望台の窓ガラスが何枚も吹っ飛び、その窓ガラスがはま

つていたであろう窓枠から吹き上がっている黒煙が被害の大きさを物語っているようだ。

「それで、被害の方はどうなんですか？」

大神があやめに聞く。

「うん…。私も電話で聞いたただけだから詳しくはまだわからないんだけど、まだ展望台が開く前だったから怪我人がいなかったのが不幸中の幸いだっただけ、花やしき支部によると、暫くは十二階を臨時休業にするらしいわ。花やしきの方も今日一日臨時休業にするそうだし…」

「…それが一番いいですね」

と、

「あやめはん！」

紅蘭が二人の側に来た。

「どう、紅蘭。被害の状況は？」

「破片が花やしきの方にも飛んできて、いくつかの乗り物が壊されとるわ。開演前いうことで怪我人が殆ど出なかったのは不幸中の幸いやったな」

「浅草寺の方は？」

「今、カナはんとマリアはんが調べとるわ」

「あやめさん、行ってきました」

程なくマリアとカナの二人が戻ってきた。

「状況はどう？」

「はい。怪我人が出た模様ですが、すでに病院に送ったそうです」

「破片が飛んできて壊された店もいくつかあったぜ。周辺は今、立入禁止になってる」

「あやめさん、住民の皆さんの避難、完了しました！」

避難誘導をすみれやアイリスと一緒に手伝っていたさくらがやってきた。

「わかったわ。さくら、みんなをここに呼んできて。それから、今から花やしき周辺は立入禁止にするわ」

「はい！」

そして周辺は急に慌しくなっていた。

*

「…それで、爆発した際の状況と言うのは？」

大神が警官に聞いた。

「はい、開園前の花やしきの行列に並んでいた目撃者の証言によると何でも十二階の展望台から爆発音がして、ガラスが一斉に割れて煙が上がったそうです」

「展望台から？」

「はい。幸い人通りが少なかつたこともあつて怪我人はいなかったんですが…」

「…となると…」

「はい、おそらく何者かが前もつて展望台に爆発物を仕掛けたのではないかと思うのですが…」

それから暫く経つてから、一人の警官がなにやら紙包みを持って大神たちのもとにやってきた。

「何かわかつたか？」

「はい、爆発物が仕掛けられていた、と思われる箇所がわかつたんですが、どうも妙なんですよね」

「妙？」

「ええ、どうも爆発物が望遠鏡に仕掛けられていたようなんですよ」

「望遠鏡？」

「見てみますか？」

そしてその警官が紙包みを開いて見せた。

その中には筒が半分は吹っ飛んでいる望遠鏡があつた。

「…これは？」

「ええ。展望台に観光客が遠くの景色を眺める事ができるように望

遠鏡が備え付けてあったでしょ？ どうもそれらしいんですよね」

それを聞いて二人は昨日の事を思い出していた。

「何でも、この望遠鏡が置かれてあったあたりの火勢が一番強かった、と言うこと、周辺にこの望遠鏡の破片が幾つか発見された、という事で、爆発物はこれに仕掛けられていたのではないか、と言うことなんです、ただ、ひとつ妙なことがあって」

「妙な事？」

「ええ。何でも関係者によるとこの望遠鏡に『故障中』との紙が貼ってあったらしいんですが…」

「…あの望遠鏡か！」

紅蘭が思わず声を上げた。

「あの望遠鏡？」

「あ、いえ、昨日、ウチと大神はんの二人で実は十二階に昇ったんですよ。その時にその、紙が貼ってあったという望遠鏡見つけて…」

「あ、そうですか。いや、それがですね。関係者に聞いてもその紙を誰が貼ったか、わからない、と言うことなんですよね」

「わからない？」

「ええ」

「…となると犯人の仕業でしょうか？」

大神が言う。

「うーん…、昨日聞いたお話から考えるとそうとも考えられませんが…」

そのときだった。

「…そうか、そういうことやったんか！」

不意にさっきから望遠鏡を眺めていた紅蘭が叫んだ。

「…紅蘭、何かわかったかい？」

「…なんで、この望遠鏡が爆発したかわかったんや」

「…どういうことだ？」

「…これも簡単な仕掛けや。太陽光を凸レンズで集めて、その焦点

を紙に当てるとどうなるかは知ってるやろ？」

「…それは知ってるさ。集められた太陽光は焦点を結んだ紙に引火する…、つてまさか！」

「そのまさかや。犯人はそれを利用したんや。知つての通り、望遠鏡言うのは凸レンズを先に使ってるからな。その凸レンズに太陽光を集めて導火線に火をつければそれでドカンや。おそらく、先端の凸レンズが焦点を結ぶ所に前もって導火線をつけたんやろ」

「…じゃあ、故障中の札は？」

「変に悪戯されないためや。犯人はおそらく、十二階が閉まっている間にでも忍び込んで望遠鏡に仕掛けを作っておいたんや。そして先端の凸レンズを太陽の方角に向け、変にいじられないように『故障中』の札を下げる。で、後は太陽が昇ってきて、凸レンズを通して、焦点が導火線に集まって引火するのを待つ。角度を調節すれば狙った時間、とまでは行かなくとも、それに近い時間で爆発させる事は可能やからな」

「…」

「…ただ…」

「ただ？」

「まずまずこれで犯人の目的がわからなくなつたわ。一体犯人は何が目的なんやろか…」

「うーん…、確かにそうだけど…」

「そういうと大神も考え込んでしまった。」

「…どないしたんや、大神はん？」

「…いや、ちよつと気になることがあつてね」

「気になること？」

「それは帰ってから話すよ。オレも考えをまとめたいからな」

(第3話に続く)

第3話〜太正12年8月29日〜

その日の朝。紅蘭が階段を降りようとすると、あやめが階段を昇ってきた。

「おはよう、紅蘭」

「おはようございます、あやめはん」

「…早速で悪いんだけど、大神くんが紅蘭に話がある、って言うてたわよ」

「大神はんが？」

「そう。食堂で待ってる、って」

帝劇の食堂。

あるテーブルの席に大神が座って朝食を食べていた。

「大神はん、おはようさん」

紅蘭が大神の座っていた席にやってきた。

「あ、おはよう」

「あやめはん聞いたんやけど、なんか話があるらしいな」

「まあな。…ところで、まだ朝飯は食べてないのかい？」

「うん」

「じゃあ、ここに持って来いよ」

「あ、わかったわ」

そして紅蘭が朝食の載った盆を持ってやってきて、大神の前に座った。

「…ところで大神はん、その、話ってなんや？」

すると大神は箸を止めて、

「ん？ 紅蘭、今日暇か？」

「う、うん。午前中はこれといった用事はないわ」

「そうか。実はこれから今から帝都日報社に行こうと思ってね」

「帝都日報社？」

「ああ。確か今回の発明コンテストの主催は帝都日報社だろ？ それでちよつと気になることがあってね」

「気になること？ それはなんや？」

「いや、オレの考えが正しければいいんだけど、もしかしたら思い過ぎしかもしれないからね。とにかく今回のことに関して少しでも手がかりになればいいと思ってね」

「…そうか、そういうことならウチも一緒に行くわ」

「じゃあ、これからちよつと先方に連絡とか入れなければいけないから。そうだな、9時にロビーで待っているから」

「わかったわ」

*

そして9時にロビーで待ち合わせた大神と紅蘭はその足で帝都日報社に向かった。

帝都日報社の近くに来ると、大神はなぜか帝都日報社に直接行かずに、紅蘭を近くのカフェーに誘い、中に入った。

珈琲二つを注文すると大神は改めて紅蘭と向かい合う。

「…一体どうしたんや、大神はん？ 帝都日報社に行くんやなかったんか？」

「いや、勿論帝都日報社にはこれから行くけど、その前に紅蘭にオレの考えを聞いて欲しいんだ」

「大神はんの考え？ 一体なんや、それは？」

「いや、今回の事件は発明コンテストに関連があるって思ってね」

「発明コンテストに？」

丁度運ばれてきた珈琲に口をつけると大神は、

「…紅蘭、確か犯人は紅蘭にこんな事を言ったそうだね？ 『今回

の発明コンテスト、おまえも応募したんだろっ』って」

「…それがどうかしたんか？」

「犯人はどこで紅蘭はコンテストに応募した、って知ったんだ？」

「…そ、そういえばそうや。ウチ、大神はんや花組のみんなの他には誰にも今回のこと言うたらへんわ」

「オレだって、周りの人には紅蘭が発明コンテストに応募した、なんて言っていないし、他のみんなもそれとなく聞いてみたけど、誰一人として言っていないそうだ」

「…となると…。犯人は何でウチが応募したいの知つとるんや？」
「それなんだよ。…確かあの発明コンテストの主催は帝都日報社だろ？ となると犯人は関係者が誰かを通して紅蘭が応募した事を知つたんじゃないか、ってね。それを今から聞いてみようかと思ってるんだ。勿論それが本当に今回の爆破事件と関係があるのかどうかはわからないし、犯人に直接結びつく可能性も余り期待できないとは思うけど、話を聞いて何か手がかりになればいいんじゃないか、って思ってるね」

「…そう言われて見ればそうやな。何か手がかりになりそうなものちゃんと調べな」

「…よし、じゃ珈琲を飲み終わったら行こうか」

*

帝都日報社の建物はいかにも、と言った感じでその場に建っていた。

噂では帝都・東京で一番発行部数の多い新聞だそうで、これだけの大きい建物も作ることが出来るのだろう、

大神が受付で「先ほど連絡をした大神ですが」と名乗ると、受付は丁寧にも帝都日報社の編集局の扉の前まで二人を案内した。

そして編集局に入ると相手が大神と紅蘭だった、と言うことからか、わざわざ編集長と名乗る人物が二人を出迎えた。

「いや、大神と言う名前を聞いたとき、もしかしたら、思ったんですが、やっぱり大神少尉殿でありましたか」

「いえいえ、こちらこそこんな大層なお出迎えがあるとは思いませんでしたよ」

「…それで、今日は何の御用で？」

「いえ、日本橋と浅草のことについて知りたくてね」

「…爆破事件、ですか？」

「ええ、ちよつと気になることがありまして」

「…それじゃ、こちらへ」

そついうつとその編集長は二人を応接室へと案内した。

*

「こちらへどうぞ」

そついうつと編集長は二人にソファを勧めた。

おそらく編集局に勤めている記者であろう、一人の男が3人の前に茶の入った湯呑みを置くと、編集長は暫く誰も通さないように告げた。そして、

「…それで、爆破事件について、とは？」

といきなり大神に聞いてきた。

「いえ、その前にひとつお聞きしたいんですが…。発明コンテストの審査は進んでいるんでしょうか？」

「発明コンテスト？」

「ええ」

「…ちよつとそれは教えられませんなあ」

「教えられない、って…」

「いや、今回のコンテストに関しては徹底した秘密主義でして」

「秘密主義？」

「はい。今回の発明コンテストは帝都日報社の社運を賭けた、と言つてもいいくらいの催しですからね。審査員の方々も貴族院議員とか、帝大の教授とか、有名作家とか名のある方々を揃えておりまして。上の方もなんとかこのコンテストを成功させたい、と張り切つておるんですわ」

「…つまり、部外者に余計な事を知られたくない、とこついうことになるわけですね？」

「…そついうことになりますね。それで、一応来週が発表でしょ？」

その発表当日に我々に知らされることになっているんですよ」

「…そうですね」

そう言うと大神は黙り込んでしまった。

「…どうかしましたか？」

「…いえ、ちよつと気になることがありまして…」

「気になること？」

「ええ。日本橋の爆破事件のあった日のこと、覚えてらっしゃいますか？」

「ええ。あれほどの爆破事件が日本橋で起こるとは思いませんでしたからね」

「その事件の前日に、紅蘭の元に一本の電話がかかってきたんですよ」

「電話が？」

「はい」

そして大神はと紅蘭は交代交代でその電話の内容を聞いてついで話した。

「…と言うわけなんですよ」

「うーん…。それで大神少尉の気になることは？」

「…この新聞社ではそういった、応募者の情報を知らせる、とかそういうことはあるんですか」

「そんな事あるわけないでしょう。先ほども言いましたけど、今回の発明コンテストは帝都日報社が社運を賭けての催しですので徹底した秘密主義で行なっています。さつきも言ったとおり、我々も審査の内容を知る事が出来ないんです。今回のコンテストの内容は本当に上層部の一部でしか知ることが出来ないのですよ。審査員になっている議員や帝大教授の皆さんにも必要以上のことは話さないようにお願いしているし、我々も今回のコンテストに対しては外部のものに教えるな、と言われてるんです。勿論、応募者の情報を教えるなんてもつてのほかです」

「そうですね…」

と、今まで黙っていた紅蘭が、

「…確かに編集長はんの言うこともわかります。でも、犯人はウチに何回も電話をかけています。ウチははっきり言って、これは犯人のウチに対する挑発や思ってます」

「挑発？」

「はい？ ウチに爆破予告の電話をかけて、あんな風に爆破事件を起こされて黙っているわけいかなのです。編集長はん、何でもええんです。編集長はんのわかる範囲で何とかお答えしてもらうわけにはいかなのでっしゃるか？」

「うーん…」

そついうと編集長は黙り込んでしまった。

「…どうしたんですか？」

「いや、それほどまでに言われるのならば、いろいろと教えてあげたいのは山々なんです。実は私もわからんのですわ」

「…わからない、…ってどういうことですか？」

大神が聞いた。

「さつきも言ったとおり、今回の発明コンテストは徹底した秘密主義でしょう？ それなので我々にも情報が伝わってこないのですわ」
「伝わってこない？」

「ええ。どの位の応募が来たかくらいは教えてもらいましたけどね。これは別のところから聞きましたけど、紅蘭さんも今回のコンテストに応募した、と言う話も聞きましたよ。まあ、紅蘭さんのそれがどういう結果になるかは我々にもわかりませんがね」

「…となると、必要最低限の情報しか知らされていない、と言うことになるわけですね」

「ええ。それがどうかしましたか？」

「そうですか…」

そついうと大神は黙り込んでしまった。

「…どうかなさいましたか？」

「…いえ、編集局の中の人でも知ることが出来ないのを一般の人が

知ることとは出来ませんよね」

「…ええ、まあ」

「…となると、犯人はどうやって紅蘭の応募を知ったんでしょうか？」

「さあ、そこまでは…。いや、私も紅蘭さんが応募した、と言うことは二、三人の部下に話した程度ですからね。まあ、自分の部下を疑うわけではありませんけど、社の中には口が軽いヤツもいますからね。そんなヤツが酒の場などでつい口を滑らせてしまっただけで紅蘭さんが応募した、と言っていない、とも言えないわけです」

「…まあ、自分も経験ありますけど、どんなに秘密にしたって結局は何らかの形で情報が漏れてしまう、ってことも多いんですよ。」

「…それですね、編集長」

「…なんでしょうか？」

「…今回の発明コンテスト、発表を少し先延ばしするわけには行かないんでしょうか？」

「…どういうことですか？」

「いえ、先ほどもお話ししましたが、今回の連続爆破事件、紅蘭の元にかかってくる電話と言い、次々と実際に起こった日本橋や十二階の爆破事件といい、どうも今回の発明コンテストが何らかの原因になってるんじゃないか、と思うんですよ」

「…なんですか？」

「…いえ、勿論まだまだわからないことが多いですよ。何故犯人は紅蘭の元に電話をわざわざかけて犯行を予告するのか、一体犯人の目的はなんなのか？ そもその動機すらわからない。でも、紅蘭にかかってきた最初の電話の内容から考えて、今回の発明コンテストが何らかの形で関係していると思うんですよ」

「うーん…」

「…勿論、これは自分の勝手な推測ですし、こういうことを頼むのも随分あつかましいとは思いますが、ですが今、このような状況で結果を発表するというのはいかがなものかと思ひまして」

「うーん…、確かにそういわれればそうですが…」

「何とかお願いできないでしょうか？」

「…わかりました。最終的な判断は上が決めることですけど、進言してみます」

*

そして帝都日報社の建物から出る二人。

「…なんかあんまり参考になるような話は聞けへんかったな」

紅蘭が言つと大神は、

「…いや、そうでもないよ」

「そうでもない？」

「これで少しは犯人が絞られたんじゃないか？」

「絞られた？」

「ああ。犯人はとにかく何処かで紅蘭がコンテストに応募した事を知ったんだ。あの記者たちには口外するな、と伝えられているんだし、情報もそれほど入ってこない。そもそも紅蘭が応募してこと自体だつて余り知られていないんだ」

「じゃあ…」

「ああ。それをどうやって知ることが出来たか、それさえわかれば後は自然と犯人像も見えてくるさ」

「…でも、これで犯人がまた何かやらかしはせえへんか心配やな…」

「…確かに紅蘭の言つとおりだな」

*

その翌日に帝都日报社から「お知らせ」として「審査員の議論がなかなかまとまらないため発明コンテストの結果発表を1週間延期する」との告知が出された。

「…何とか話は通つたようだな」

帝都日報のその記事を見て大神が呟く。

「…でも犯人もこの記事を読んでるはずや。一体どう出てくるやろ？」

紅蘭が言う。

「さあ、それはわからないな」

（第4話に続く）

第4話 太正12年9月1日

大帝国劇場に警察がやってきたのはその日の朝の事だった。

「大神さん、ちょっといいですか？」

由里が大神の部屋にやってきた。

「やあ、おはよう、由里くん」

「あ、おはようございます」

丁度由里は大帝国劇場にやってきたばかりだったのだ。

「それで、どうしたんだい？」

「いえ、警察の人が来て、大神さんに聞きたいことがある、って」

「オレに？」

*

「やあ、これは大神少尉」

玄関に行く二人の刑事がそこにいた。

「…それで、何の御用でしょうか？ 例の連続爆破事件でしょうか？」

「…それに関係あるかどうかわからないんですけどね、実は昨日海軍から被害届が提出されましたね」

「被害届？」

「ええ。なんでも昨日、海軍の火薬庫から火薬が何者かによって盗まれたそうなんですよ」

「火薬庫から…、ですか？」

「ええ。昨日の夜に点検した時はちゃんとあったんですが、今朝確認したところ、火薬が入った袋が一袋なくなっていたそうなんですよ」

「袋が、ですか？ しかし…」

「ええ、わかってます。保管は厳重にしているんですけど、おそらく犯人はその警戒の隙を突いて盗み出したのではないか、と言うことなんです。実はですね。犯行があったと思われる時刻に怪し

い人影を見た、と言う目撃証言があつたんですよ」

「それで自分に現場不在証明を聞きに来た、という事でしょうか？
だとしたら、昨日は自分はずっとここにいましたし、さくらくん
たちに付き合つて買物にも行つてましたよ。店の人に聞けば証人
になつてくれますよ」

「いやいや、別に大神少尉を疑つてゐるわけではないんですが…。
大神少尉はそういった犯人の心当たりとかはありませんか？」

「いえ、自分は特には…。大体、その、今回の連続爆破事件と関係
があるかどうかもわからないのではないんですか？」

「まあ、我々は両方の線から捜査はしてゐるんですが…。ただ、こ
このところの爆破事件もありますからねえ。今から海軍の方にも話
を聞こうと思つて、ついでに、ということでごちよつと寄つただけ
ですから」

「そうだったんですか…」

「それじゃ、我々はこれで。あ、何かあつたら警察の方に連絡をく
ださいね」

そういうとその二人の刑事は出て行つた。

*

「…なんか気になるなあ…」

大神から話を聞いた紅蘭はそう呟いた。

「…確かにそうだな。爆発物を作る際には火薬とかそういうたもの
が必要だからな」

「…それに、そういうた知識だつて必要や。とてもやないけど、爆
弾なんて普通の人がそう簡単に作れる者やないで」

「…そうだな。としたら犯人は…」

そこまで言いかけたとき、不意に事務局の電話が呼び出し音を鳴
らした。

「…なんだろう」

「行つてみようか？」

そして大神と紅蘭は事務局へ向かった。

事務局に行くと、由里が電話を取っていた。

「はい、少々お待ちください」

そう言うと由里は受話器の手でふさぐと紅蘭に、

「…こないだと同じ男よ」

その言葉に紅蘭は頷くと受話器を受け取る。

大神も紅蘭の傍で聞き耳を立てる。

「…紅蘭か」

その声を聞いた紅蘭は「あの男だ」と言うのに気がついた。

「紅蘭…」

大神が話しかけるが、紅蘭は口の前に人差し指を立てる。

その合図に大神が頷く。

「…一体何の用や?」

「…おととい、帝都日報社に行ったようだな」

「…それがどうかしたか? アンタには関係ないことやる?」

「…苦労なことだな。…どうだ、アレから考えてみたか?」

「…何のことや?」

「オレの発明とアンタの発明、どっちが優れているか、だよ」

「まだ発表もされてないのに、か? アンタの発明がどういったものか、帝都日報社の人はなんも教えてくれへんかったわ」

「…そうか、まあいい。明日を待て」

「明日がどうしたんや?」

「また、銀座のある場所を爆破してやるぜ」

「…なんやて? それは一体どこや?」

「何処かは明日になればわかるぜ」

そういうと電話は一方的に切れた。

「…どうだった?」

大神が聞くと、

「次は銀座や、言っとつたわ…」
「銀座だって？」

紅蘭の部屋。

紅蘭と大神の前には銀座周辺の地図が広げられていた。

「…次はどこやる？」

「…銀座といつても色々と場所があるからねえ。それこそこの帝劇だって銀座にあるし…」

「それに銀座といつたら毎日多くの人でにぎわう場所や。もし銀座のど真ん中で爆破事件なんかあつたら、被害がどれほどのものか想像できんで」

「日本橋といい花やしきといい、一步間違えたら大惨事だったからな」

「一体犯人は何が目的なんやる…」

*

さて、その翌日。

銀座にやって来る人たちは1日どれくらいいるのかそれこそ見当がつかないが、その銀座にやって来る人たちの間でちょっとした流行になつているのが「昼に銀座の四越百貨店で買い物を楽しみ、夜に大帝国劇場で芝居見物」というものである。

四越百貨店は銀座で本格的なデパートメントストアとして開業して以来連日多くの買い物客でにぎわっており、花組の面々も（特にすみれが）休日ともなると買い物を楽しんでいるところでもある。

その日の四越百貨店。

その中にある時計売り場にすみれが来ていた。

「…もしもし、ちよつとよろしいかしら？」

「あ、これはすみれお嬢様、いつもご鼻眞に」

中から店員が出てきた。

「…この間お頼みした時計の修理、終わっていますかしら？」

「あ、それですか。少々お待ちくださいませ」

そして店員が奥へ引っ込み暫くすると、

「…お待たせしました。これで御座いますね」

そして店員は木箱を差し出し、蓋を開けると、中から西洋のものとと思われる置時計が出てきた。

「ちゃんと修理しておきましたよ。それに念のために古くなっていた部品も交換しておきました」

「あら、そうですね。悪いですね。何せ、これはお爺様がわざわざたくしのために買った瑞西^{スイス}製の時計ですからね」

「存じ上げております。すみれお嬢様ご愛用の置時計ですから、手前どもと致しましても一流の職人に修理させましたので、ご安心くださいませ」

「そうですね。それでは修理代の方は後で取りに来てくださいませ」

「ありがとうございます」

そしてその時計店の店員は深々と頭を下げた。

すみれが店を出ると入れ違いに一人の人物が店に入っていた。手に大きな荷物を抱えている。

「…？」

時計店を出たすみれは何か不審に思ったか、後ろを振り向いた。

「…気のせいかしら？」

その客はなにやら包みを持っていてことから、おそらくすみれのように時計の修理を頼みにでも来たのだろうが、それにしてはどことなく怪しげな感じがしたのだった。

そしてすみれはついでに、ということと呉服売り場や洋服売り場を覗き、しばしの間買い物を楽しんだ。

*

そしてすみれが四越百貨店を出ると、

「…今何時かしら？」

何気なく辺りを見回すと、丁度近くの店にかかっている時計が目に入った。

十二時を指そうとしている。

「…どうりで空腹になるはずですわ。もうお昼ですものね」

そしてすみれは大帝劇場へ足を向けたときだった。

ドカーン！

不意に辺りに大きな爆発音が響いた。

「…な、何ですの！」

そして辺りを見まわす。

すみれの周りに瓦礫が物凄い勢いでバラバラと落ちてくる。

一番大きい瓦礫を咄嗟に交わすとすみれは一目散に走り、改めて自分の走ってきた方角を振り返る。

「……！」

思わずすみれは絶句した。

四越百貨店の一角が爆破されたように吹っ飛んでいて、そこから濛々と煙が上がっていたのだ。

*

「四越百貨店で爆破事件発生」し、「すみれがその爆発に巻きこまれた」と言う話を聞いた大神と紅蘭は現場へと走っていった。

現場は既に大勢の野次馬でにぎわっており、次々と警察や消防の関係者が百貨店の中に入っていく。

その近くで臨時に設けられた救護所にすみれの姿を見つけた二人はそこに駆け込んでいった。

「すみれくん、大丈夫か？」

大神が聞く。見るとすみれは左手に包帯を巻いていた。

「え？ ええ。ほんのかすり傷ですわ。お医者様だったら大袈裟に包帯巻くんですもの」

「まあ、それならいいんだけど…」

そのときだった。

ひとりの警官が救護所にやってきた。

その警官は大神の姿を認めると、

「あ、あなたは大神少尉」

どうやらこの警官は大神の事を知っているようだ。

「あ、自分の事をご存知ですか？」

「ええ、先日の日本橋の時にもお見かけしましたし」

「それならば話は早い。…紅蘭、すみれくんのほうを頼む」

「わかったわ」

そう言う大神は外に出た。

「…一体何があったんですか？」

「…私も話を聞いたただだからよくわからんですが、何でも爆弾が仕掛けられていたらしいんですよ」

「爆弾？」

思わず大神が聞き返す。

それを聞いた紅蘭も思わず二人のほうを向く。

「…一体どういうことなんですか？」

「いえ、まだ調査段階でなんとも言えんですが…、どうやら何処かに爆発物が仕掛けられていたようですな」

「…それじゃあ…」

「ええ、まだなんとも言えませんが、先日の日本橋や花やしきの爆破事件と同一犯の疑いもあるわけなんですよね」

「…あの、よろしいですか？」

「なんでしよう？」

「…詳しいことがわかったら大帝国劇場のほうにも連絡をいただけませんか？」

「…どういうことですか？」

「…いえ、ちょっと気になることがあって。それにすみれくんもあ

あいう風になってしまったし……」

「……いいでしょう。詳しいことがわかり次第、お教えしますよ」
「ありがとうございます！」

幸いすみれは軽傷だった、と言うこともあり帰宅を許され、大神たち三人は帝劇に戻った。

花組の面々もすみれが巻き添えを食った、という事で心配をしていたようだが、幸いにも軽傷で済んだ、と言う事を聞いて安心したようだ。

*

そして警察からの連絡があったのは翌日の昼過ぎのことだった。

「……はい、はい。……そうですね。わかりました。ご面倒お掛けしました」

そして大神は電話を切ると、紅蘭の部屋に向かった。

「紅蘭、いるかい？」

「……何の用や？」

紅蘭が顔を出した。

「今警察から連絡があった。どうやら現場は時計売り場らしいよ」

「時計売り場？」

「ああ。あの後詳しく現場検証をしたところ、爆発物の部品と思われるものが見つかったらしい」

「……じゃあ、犯人は時計を利用して時限爆弾を作った、言うことか？」

「時限爆弾？」

「ちよつとでも機械の知識があれば時限発火装置を時計に組み込んで、爆破装置を作ることくらい容易いで。ウチかて作れ言われたら簡単に作って見せるわ」

「……そうか、その可能性はあるな」

「そついえば大神はん、すみれはんが言うつったな。『時計売り場でなにやら怪しい人物を見た』って」

「そういえば言ってたな。警察の人にも同じ事言っていたらしいよ。ただ、すみれくんも顔までよくわからなかったらしいけど…」

「となると犯人は…」

「たぶんその男なんだろうが…。なんか気になるな…」

大神が呟いた。

「気になる？ どうしたんや、大神はん？」

「いや、犯人が何者なのかよくわからないし、一体何が目的なのもよくわからないし。それに…」

「それに？」

「なんか気になるんだよな…」

「…もしかして、海軍の火薬庫から爆薬が盗まれた言うあれか？」

「ああ。今回の事件と関係があるかどうかわからないけど…」

と、大神は何かを思いついたかのように。

「そうだ、紅蘭。オレは今から、帝都日報社に行くよ。どうしても気になることがあってね」

「じゃあ、ウチも行くわ」

「いや、紅蘭は事件の方を引き続き調べておいてくれ。あくまでもこれはオレの個人的な用事だからね」

「…わかったわ」

そついうと大神は出かけていった。

*

そして出かけた大神が戻ってきたのは既に日もとつぷりと暮れ、既に7時を過ぎていた頃だった。

「…大神はん、おかえり。随分遅かったなあ」

紅蘭が出迎える。

「ん？ いろいろと話を聞いてたからね。ついでに海軍の方にも行って来たんでね。すっかり遅くなっちゃったよ」

「海軍やて？」

「どうも火薬庫から爆薬が盗まれた、って事件が気になってね。海軍には知り合いが多いからついでに事件が起きた状況について聞い

てきたんだ」

「ふうん…。ところで、夕食は食ったんか？」

「あ、帰りに外で食べてきたよ」

「それならええんやけど…」

「それより紅蘭、今からいいか？」

そういつと大神は紅蘭を食堂に連れて行った。

(第5話に続く)

第5話 太正12年9月3日

帝劇の食堂。その一角に大神と紅蘭が向かい合って座っている。

「…で、大神はん。どんなことがわかつたんや？」

「ああ、色々と帝都日報社や海軍で聞いてみたんだけどね。今回の事件は例の発明コンテストがなんらかの関係があるみたいだね」

「…それはわかつとるわ。何でも帝都日報社が社運をかけた一大企画やからな」

「どうしても、つてことで帝都日報社で教えてもらつたんだけどね。今回のコンテストはかなりの大物が審査員を勤めているようだよ」

「…それホンマかいな？」

「ああ。帝大の教授に貴族院議員に陸海両軍の大佐、勿論帝都日報社の社長も審査委員長として参加している。それだけ箔をつけようとしているらしいんだな」

「…でも大神はん。このあいだ聞いたけど、審査の内容は社外秘どころか審査員しか知らないんろ？」

「…果たしてそうと言いつけるかな？」

「…どういうことや？」

「海軍で聞いたんだけど、審査員になつている海軍大佐は、審査のあるときだけ帝都日報社に出かけていて、後は普通に海軍で仕事をしていたそうだよ」

「それはそうや。兵隊さんには兵隊さんの仕事があるさかいな」

「そういうこともあつてかあらかじめ審査員にはその、発明品の内容を収めた冊子を配っていたらしいんだ。残念ながらその冊子は見せてもらえなかつたけどね」

「ふーん。じゃあ、その気になれば…」

「ああ。海軍で話を聞いてみたら結構、海軍の中にも紅蘭が応募していたのを知っていたヤツも多かつたぞ」

「ははは…」

それを聞いた紅蘭が思わず苦笑いを浮かべる。

「…それともうひとつ。冊子を見せてもらえなかったし、具体的には教えてもらえなかったけど、今回のコンテストは紅蘭のように発明好き、と言った人物ばかりではなく、そういう大学の助教とか、機械を専門に扱っている業者からの応募も結構あったらしいんだ」
「…となると…」

「ああ。結局はどんな秘密主義に徹したところでどこからか情報は漏れてしまうものなんだよな」

「…となると犯人は何処かでウチがコンテストに応募したのを知った…」

「普通に考えればそうだな。それで…」

そこまで言うとは意に大神は黙り込んでしまった。

「？ ……どうしたんや、大神はん？」

「ん？ いや、なんでもない。ここから先はオレでもわからないことだらけだからな」

*

その翌朝のことだった。

「…由里、大神はんどこ行ったか知らんか？」

紅蘭が由里に聞いた。そう、大神の姿が見当たらないのだ。

「ん？ 大神さんならなんか用事があるとか言って、さっき出かけて行ったわよ」

「用事、つてなんやろ…？」

「さあ…、あたしもそこまでは聞いてないから。それよりどうしたの、紅蘭」

「ん？ いや、大神はんに用があったんやけどな。まあええわ」

そして大神が帰ってきたのは昼過ぎのことだった。

「…どこ行ってたんや、大神はん？」
紅蘭が聞く。

「いや、まだちょっと事件のことで気になることがあってね。色々

と調べてきたんだ」

「調べてきた？」

「…今からいいかい？」

「ああ、ええわ」

そして大神は紅蘭を自分の部屋に招いた。

「実は今回の事件を最初から考えてみたくてね」

「最初から？」

「ああ。そもそも今回の事件は紅蘭に一本の電話がかかってきたことから始まったんだろ？ 『どっちの発明が優れているか』とか言
って」

「まあ、そうやな」

「それで、犯人はどこで、どうやって紅蘭が今回のコンテストに応募したのを知ったんだらうか、つてずっと気になってただけど、可能性がひとつ見つかったよ」

「…昨日大神はんが言った『どこからか情報は漏れてしまっ』いうアレか？」

「ああ。今日は帝都大学の方にも行ってきたんだけどね。結構学生の間でも話題になっていたようだよ」

「ふーん。じゃあ、結果までは知らなくても誰が応募したか、くらのことは知っている、いうわけやな」

「ああ。それからこれを見てくれ」

そういうと大神は一冊の本を取り出した。

「…これは何や？」

「帝都大学について書いてある本だよ」

「帝都大学？」

「…ああ。何でもオレがこっちに来たのと入れ違つかのように、海軍に帝都大学から来た人がいてね。その人に事情を話して借りてきたんだ。…その中でもっとも気になるのがこの男だ」

そう言うとき大神はある頁を開いてそこにある写真を指差した。

「…この男は？」

「今回の発明コンテストで審査員を勤めている大学教授の助手だ。どうも今回のコンテストにその教授には内緒で応募したらしい」

「でも、そんな事できるんか？」

「帝都日報社だっていちいちそこまで調べることはできないだろう？ それにあくまでも一個人として応募するのを誰だって止められないよ」

「まあ、たしかにそうやな…。でもなんで大神はん、この男が怪しい言っんや？」

「海軍でこの本を借りた後に帝都大学の方へ行つて話を聞いてみたんだけど、何でもこの男が遅くまで研究室にいてなにやら機械を作っていたらしいんだ」

「機械を？」

「ああ。あのコンテストは4月に応募を開始して7月末日が締め切りだっただろ？ 丁度その頃にその、助手と言う男が機械を作っていた、って言うから時間的には一致するんだ。それに…」

「それに？」

「…ここ数日の連続爆弾事件に関しても大学は夏休みだと言うのに大学に来て研究室に閉じこもっていた、と言う証言もあったし…」

「それが事件とどう関係あるんや？」

「その男は、大学で機械の事を教えていてそっちの方にはかなりの知識を持っているらしい。紅蘭も前に言っていただろう？ 『今回の爆弾は機械の知識がある人物なら簡単に作れる』って」

「…確かにそうは言うたわ。でもそれだけじゃ…」

「ああ。確かに犯人とは言い切れないからな。何か決定的な証拠が欲しいが、現時点ではその証拠も見つかっていないし…。とにかく、この男が犯人かどうか、なんて言い切れないんだよ」

「…まあ、とにかく、今はこれ以上事件が起こらないようにするだけやな」

*

その次の日のことだった。

大神に警察から至急来てくれ、と言う連絡があった。

何故警察が自分なんかには、と思いながら大神は警察へと向かった。

「失礼します」

そして大神は部屋の中に入った。

そこには三人の刑事がいた。

「まあ、楽にしてください」

真ん中に座っていた男が大神に椅子を進める。

「失礼します」

そして大神はそこにあつた椅子に腰掛けた。

「それで、何の用でしょうか？」

「いや、海軍から『どうしても大神少尉に伝えて欲しい』と言われましてねえ」

「自分にですか？」

「ええ。先日、海軍の武器庫から何者かによって盗まれたのは知っていますね？」

「はい、その件に関しては先日海軍で話は聞きました」

「…そのことなんだが…、実はあの後有力な情報があつたんですよ」
「本当ですか？」

「ええ。なんでも海軍の中で武器庫から犯人の姿らしきものを見た、
と言つものが現れたんですよ」

「それで、その人物とは？」

「いや、ちよつとそこまではわからないんですけど…、ただちよつと気になることがあります」

「気になること？」

「ええ。我々もその軍人に来てもらつて色々話を聞いてみたんですが、その男の人相とかまではよくわからなかったのですが、ここ最近起きている連続爆破事件の犯人と姿かたちや特徴が似ているんですよ」

「…それじゃあ…」

「ええ。おそらく同一人物ではないか、と思うんですよ。今大急ぎで情報提供を呼びかけるチラシを作っているところですが…」

「…そうですか。どうもありがとうございます!」

「そうか、そういう証言があったんか」

大神から話を聞いた紅蘭はそう言った。

「…それから、その後興味深い報告を聞くことができたんだ」

「興味深い報告? どんなや?」

「ああ。四越百貨店の爆破事件なんだけど…」

「新しい発見があったんか?」

「ああ。あの事件で爆発物が仕掛けられたのは時計売り場なのは知っているだろ?」

「そういえばそんな話しとったな」

「実はあの日にすみれくんが見かけた、と言う怪しい人物が時計の修理を頼みたい、といって店を訪れていたらしいんだ」

「ホンマか?」

「ああ。後で修理しようとして店の奥に置いていたところ、それが爆発したのではないか、と言うのが警察の考えらしい。その爆発した時計の部品と思われるものや破片などからその修理を依頼した時計が爆発した、と見ているらしいんだ」

「…そうか…」

「それと、その爆破事件があった日の時計店の店員は重傷を負ってしまったってまだ病院で治療を受けているそうだけど、他の店員の話によると、爆発したのと同じ形の時計を以前売ったことがあるそうなんだよ」

「ホンマか?」

「ああ。そしてその店員を呼んで話を聞いてみようとしているらしいんだ」

「…じゃあ…」

「ああ。これで連続爆破事件の犯人と海軍から火薬を盗み出した犯人は同一人物かもしれない、と言うことはわかった。後はその人物が誰か、と言うことだけだな」

*

帝国華撃団は帝国歌劇団、と言うもうひとつの顔も持っている。確かに連続爆破事件のことも気になるが、それ以外の時はもうひとつの顔、歌劇団としての仕事もしなければならぬ。

9月は劇場内の設備の大規模な修理及び点検（今で言うメンテナンス）、そして次回公演への準備、という事で歌劇団の公演も1ヶ月休みなのだが、それでも稽古はしなければいけない。

紅蘭は稽古をするために自分の部屋で準備をすると舞台の方に向かっていった。

そしてある窓を見たときだった。

「…？」

ふと気になって窓の外を見る。

しかしそこには誰もいない。

「…なんやろ…」

今、外に誰かがいたような気がしたのだ。

「…どうしたんだい、紅蘭？」

そんな様子を不審に思ったのか、大神が紅蘭に話しかけてきた。

「あ、いや、なんでもないわ」

「…そうかい。今月は色々と大変だからね。色々と出入りも多いし、紅蘭にも手伝ってもらうことが多いかもしれないけれど、その時は頼むよ」

「わかつとるわ」

そして大神がその場を去る。

「…業者はんやったのかな？ …でも業者はんやったらこそこそ隠れたりしないで正面玄関から堂々とやってくるわな」

そう思いながら紅蘭が事務局の前を通りかかった時、不意に事務局の電話が鳴った。

紅蘭が見回すが、かすみも由里も買い物にでも出かけたのかい
かった。

「…しゃあないな」

そして紅蘭が電話を取る。

「もしもし。大帝国劇場です」

「…紅蘭か」

その声を聞いた紅蘭の顔色が変わる。

「…あんたか？」

そう、相手はあの、紅蘭に何度も電話をかけてきた男だったのだ。
「色々とおれの事を調べ回っているようだな」

「当たり前えや。ウチはアンタのことは絶対に許せへん。例えど
んなことがあるうと、例え地の果てでも追いかけて行って、アンタの
事を絶対にふん捕まえて見せるわ」

「…たいした自信だな。まあいい。俺もそろそろ終わりにしようか
って思ってたな」

「終わりにする？」

「ああ。そろそろオレも潮時かと思ってるからな」

「潮時やて？」

「まあいい。今度は銀座のある有名な建物だ」

「有名な建物？ どこや、そこは？」

「知りたければ自分で探すことだな。いいか、近いうちに銀座のあ
る建物が吹っ飛ぶことになるぜ」

そして電話が切れる。

紅蘭は慌てて辺りを見回す。と、丁度大神が事務局の前を通りか
かった。

「大神はん、ちょっとええか？」

「…なんだって？」

紅蘭の電話のやり取りを聞いた大神が言う。

「…確かにそう言うたわ。『今度は銀座の有名な建物が吹っ飛ぶ』」

って」

「…それにしても、一体どこを吹っ飛ばそうとしているんだ」

「さあ、ウチも犯人の目的が何処かさっぱりわからんわ…」

「…銀座には有名な建物が多くあるからねえ…」

そういうと大神も紅蘭も黙ってしまった。

「…とにかく、前向きに考えよう」

「前向きに？」

「ああ。相手は『これで終わりにしよう』って言ったんだらう？」

つまりそれは相手もそれだけ必死になっている、ってことさ」

「必死になっている？」

「ああ。これ以上何かすると自分に警察の手が及ぶと思っているの

さ」

「じゃあ…」

「ああ。相手もそれだけ追い詰められている、って言うことは必ず何処かに綻びが出るはずだ。それさえ掴めれば後は一気に捕まえることができるぞ」

「…そうやな。よし、後一步や思つてウチらで犯人を捕まえようやないか！」

「ああ。とにかく今は、次の犯行を未然に防ぐことだな」

(第6話へ続く)

第6話〜太正12年9月6日〜

朝。大神は着替えを済ませると1階の事務局へと行った。

大帝国劇場の1年に一度の大規模な総点検、という事で大神は米田やあやめから毎朝必ず事務局で打ち合わせに参加するように言われているのだ。

「支配人、あやめさん。おはようございます」

「おはよう」

「大神くん、おはよう」

既に事務局に来ていた米田とあやめが挨拶をする。

「…それじゃあ、始めるとするか」

そういうと米田は手帳を取り出した。

「…と言うわけだ。まだ始まったばかりだから色々大変だと思うが、現場のことは大神、全ておめえに任せてあるからな。何かあったらすぐ連絡をよこせ」

「はい、わかってます」

「…ところであやめくん、業者の方は？」

「そろそろ入ってくる頃だと思いますが…」

あやめが事務局にかかってある柱時計を見ながら言う。

「よし、じゃあ、後は頼むぞ。オレも後で見に行くから」

「承知しました」

そういうと大神は事務局を出て行った。

程なく帝劇に業者が次々と入っていった。

受付を兼ねている事務局で受付を済ませるとそれぞれが持ち場へと行く。

「…失礼ですが」

と、一人の男が事務局の受付にやってきた。

「はい、何の用でしょうか？」

由里が男に聞いた。

「先ほど急な連絡を戴きまして。劇場の方の電氣の様子が変わってから観てくれ、といわれまして」

「劇場の方の…？」

「…そんな連絡あったかしら…」

「変だな…。先ほどこちらの関係者だという人から連絡があったんですがね…」

「何かも間違いかもしれないけど…。ついだから見ていただけませんか？」

「承知しました」

そして男は劇場の方に向かっていった。

由里はどことなく不審な点を感じたが、それから後も次々と業者が入ってきて。受付の作業の方に追われてしまい、いつしか男の事も記憶の片隅に追いやってしまった。

*

それから何時間が過ぎた頃。

そろそろ12時になるうとしていた頃で業者も食事しようと言うことなのか次々と帝劇の食堂に集まっている。

事務局の三人は業者にお茶を出したりする仕事を任されていた。

「…みんな揃ったかしら？」

あやめが由里に聞いた。

「…あれ？」

由里はあることに気がついた。

「…どうしたの？」

「いえ、まだ一人来てない人がいるんですが」

「来てない人？」

「…どうしたんだい、由里くん？」

大神が由里に聞いた。

「いえ、まだ来ていない業者さんがいて…」

「来ていない、って？」

「ええ。何でも劇場の電気関係の点検に来た、と言う業者さんなんですが…」

「劇場の電気関係？」

「ええ、確かにそう言っていました」

「…変だな。今日は劇場の方に業者は入らない予定なんだけど」

「…確かにそうだったわね」

あやめも言う。

と、そのときだった。

「…まさか！」

大神の頭の中にある閃きが走った。

次の瞬間、大神は食堂を飛び出していた。

「大神さん、どうしたんですか？」

階段を登ろうとしたとき、大神は丁度階段から降りてくる紅蘭を見かけた。

「丁度よかった！」

「丁度よかった、…って、どうしたんや、大神はん？」

「紅蘭、ちよつと来てくれ！」

「来てくれ、って…。どうしたんや、大神はん？」

「とにかく来てくれ！もしかしたらこの帝劇の中に犯人がいるかもしれない！」

「なんやて？」

そして二人は劇場のほうに走って行く。

*

劇場に入った二人は辺りを見回す。

「…大神はん、あれ！」

紅蘭が指を指した方向を見ると、一人の男が背を向けてなにやらやっていた。

二人はゆっくりと男に近づいていく。

「…ちよつといいですか？」

大神がそこにいた男に話しかける。

「…なんか用ですか？」

男は大神たちに背中を向けたまま聞き返した。

「…何をやってるんですか？」

大神が男に聞いた。

「電気系統の点検をやっているんですが、それがどうかしましたか？」

「…今日は劇場の方には業者が入る予定はないんですがね」

「…いや、こちらから連絡があつたんですがね」

「そうですか？ 自分はそんな連絡をした覚えはありませんよ」

「…」

「自分は米田支配人から、今回の大帝國劇場における総点検の現場責任者を任されてます。何かあつたら必ず自分のところに連絡が来るはずだし、業者などへの連絡は必ず自分がやることになっていきます。つまり他の人は勝手に出来ないことになっているんですがね」

「…」

そつという男は無言で立ち上がった。

そして逃げ去ろうとしたところを、

「…待て！」

大神は咄嗟に男の肩を掴んでいた。

男が大神に殴りかかろうとするが、大神も海軍とカンナから教わった格闘術の心得があるからか、難なく男の拳をかわすと、男を後ろ手にねじり上げ、後から抱えた。

「…あんだ…」

男の顔を見た紅蘭が絶句する。大神も男の顔を見て驚いた。

「…お前、もしかして…」

そう、男の顔は紛れもなく、二人が怪しいと思っていた今回の発明コンテストで審査員を務めている大学教授の助手の男だったのだ。「…そこまで調べていたか。そうだよ、審査員の先生の助手だよ。そして、今回の事件も全部オレがやったことだよ」

男の声を聞いて紅蘭は自分に電話をかけてきた男と同じ声だったのを確かめた。

「…なんで、あんなことしたんや」

紅蘭が聞く。と、

「…全てはお前にあるんだよ」

「ウチに？」

思わず紅蘭が聞き返す。

「ああ。オレも昔から発明が好きでね。今回の発明コンテストを知ってオレの実力を試す絶好の機会だと思ったんだ。勿論オレの大学の先生が審査員を任されたのは知ってたさ。でも、それでもオレは黙って応募したんだ。オレにも自尊心と言うのがあるからな」

「まあ、それは応募するのは個人の自由や。でも、何でウチがそれに関係するんや？」

「…先生から聞いて驚いたぜ。お前も応募していたと知ってな。大学の知り合いにも郡の関係者が多いし、オレも帝劇の話は聞いていたから、お前が発明好きだというのは以前から噂は聞いてただけだな」

「…それと、今回の爆破事件がどう関係あるんや？」

「…参ったぜ。お前が応募したとなるとどう考えたってオレはかなわないからな。だったらお前に今回のコンテストに何とかしてお前に応募を取り下げて欲しかったんだよ」

「そんな事ウチができると思ってるのか？」

「勿論オレだってそんなことは思ってたさ。だったらなんかの事件を起こせばコンテスト自体が中止になるかと思ってるね」

「…それが仕掛けたのが連続爆破事件だった、と言うわけか？」

「ああ。でも結局は発表が一種間延びただけだったけどな」

それを聞いた瞬間、

「この野郎！」

大神が男を殴りつけていた。

男が床に転がる。

「…大神はん！」

思わず紅蘭が叫んだ。そう、紅蘭自身、大神が相手を殴りつけたのを初めて見たのだった。

大神が大きく肩で息をしている。

「…だからと言って他の人を巻き込んでいいと思ってるのか？ お前のその勝手な考えのせいでどれだけの人が迷惑を被ったと思ってるんだ？ お前は自分のためなら、自分が正しいと思ったら何をやっても許されると思ってるのか？ ひとつだけ言っておくぞ。海軍ではな、お前のようなヤツが一番嫌われるんだ。お前のようなヤツが戦場では真つ先に逃げ出すんだよ！」

大神が握りこぶしに力をこめる。

男の口から一筋の血が流れ落ちた。男はそれを拭くと、

「…それより、こんなところでこんなことしていいののか？」

「…どういうことだ？」

「この中に爆弾が仕掛けてあるんだよ」

「…あんた、いい加減な事言つと承知せえへんで！」

「冗談でこんなことが言えると思うか？ この帝劇の建物の中に時限爆弾を仕掛けてあるんだ。午後1時には爆発する仕掛けになっているんだ」

「なんやて？」

と、そこへ、

「どうしたの、一体？」

騒ぎ声を聞いたか、マリアがそこにやってきた。

「あ、マリアはん、大変や！この帝劇に時限爆弾が仕掛けられたらしいで！」

「時限爆弾？」

「この男がこの帝劇に仕掛けた言うんや。早よせんと猥発してしま
うで！」

「何で爆弾がここに仕掛けられたの？」

「…詳しい話は後や！今はとにかく爆弾を捜さなあかんわ！」

「わかった。みんなを呼んでくるわ」

「頼むで、マリアはん！」

程なくマリアが花組とあやめを連れて戻ってきた。

「爆弾が帝劇に仕掛けられた、ですって？」

あやめが紅蘭に聞く。

「どうやらそうらしいんや。勿論、嘘なのが一番ええんやけど、こ
こ最近起きとる爆破事件を考えるとあながち嘘だとも言えんし…」

「…じゃあ、私はこの男を警察に引き渡すから、みんなは爆弾探し
のほうをお願いするわ。業者の避難はかすみたちに頼んでおくから」

あやめが言うつと、

「お願いします！」

そして一同はその場から離れた。

*

そして七人は二手に分かれて帝劇に仕掛けられた爆弾を捜し始め
た。

「隊長、そっちはどうだ！」

二階席の方を探しているカンナが大神に叫んだ。

「今のところ見つかってないが…、そっちはどうだ？」

「こっちも見つかってねえ！」

「…一体どこにあるんだ？」

そんな中、舞台上上がった紅蘭は辺りを見回す。と、

「…？」

何か時を刻むような物音が聞こえたのだ。

「…どうした紅蘭？」

「しっ。静かにしてや!」

そして紅蘭は耳を澄ませる。

そして紅蘭は舞台の隅の目立たないところになにやら置いてあるのを見つけた。

「あれは…」

そして紅蘭が近寄ると、目覚まし時計に何か箱のようなものが接続してあるものを見つけた。

「これは？」

「見つかったのか？」

大神が紅蘭に近づく。

「これは…」

「見つかったの？」

マリアたち5人も周りに集まった。

「確か爆発するのは午後1時とってたな…」

「あと10分しかないよお!」

アイリスが叫ぶ。そう、爆弾に接続してある時計は12時50分を指していたのだ。

「大丈夫や。ウチがこの時限爆弾、分解したる」

紅蘭が言う。

「でも10分でできるの？」

「このまま爆発を待っているより、やるだけのことにはやったほうがええやる! …みんな、頼むわ。ここから出てってくれへんか？

被害は最小限に食い止めな」

「…紅蘭の言うとおりね。みんな、ここから出ましょう」

マリアたちが外に出た。が、大神は動こうとしなかった。

「大神はん。大神はんも出てってえな」

「いや、オレはここにいるよ、紅蘭」

「爆弾分解、つてもものごつつ危険なんやで! 大神はんに何かあったら大変や! 大神はん、頼むわ。こっから出てってや。死ぬのはウチひとりで充分やから……」

「馬鹿野郎！ 隊員をほつといて隊長が逃げられるか！」

「…大神はん…」

紅蘭は大神の表情に決意みたいなものを感じ取った。

「…わかったで、大神はん。ウチを手伝ってや」

「紅蘭。地獄までの道案内、してやるからな」

「そんな縁起の悪いこと、言わへんでほしいわ」

二人は爆弾を舞台の真ん中に持ってきた。この時点で残り時間は六分弱である。

「…ほな行くで、大神はん」

紅蘭は慎重に螺子を外した。蓋を外すと配線がむきだしで出てくる。

「…大丈夫か、紅蘭？」

「こんなの、光武の点検に比べたらまだまだ子供の遊びやで」

紅蘭は配線を見ながら、どこを切っていくべきか頭の中で考える。そして、

「大神はん、ペンチくれへんか？」

大神がペンチを渡す。

紅蘭は慎重に配線を切っていく。

その間大神は息を潜めて紅蘭の解体作業を眺めていた。

「…最後は、これや！」

紅蘭が最後の線を切った。

「終わったのか？」

大神が言う。

「…終わったで。これでもう大丈夫や」

紅蘭がこう言ったのは後数秒で午後1時になるうとときだった。

午後1時を過ぎて何も起こらなかったのを知ってようやく大神も安どの表情を見せた。

やがてあやめの連絡で男が警察に連行されていき、警察の事情聴取や現場検証で大帝国劇場はてんでこ舞いの忙しさとなってしまい、結局、この日は点検が出来ずじまいとなってしまった。

*

翌日のことだった。

「紅蘭、いるかい？」

大神一郎が封筒を持って花組のもとに来た。

「…何の用や？ 大神はん」

「お待ちかねの結果が来たようだよ」

大神が差し出した封筒には「銀座四丁目大帝国劇場内 李紅蘭様」と書かれた宛名の裏に「帝都日報社」と書かれてあった。

「どうやら発明コンテストの結果のようね」

「ねえねえ、なんて書いてあるの？ アイリス見たーい！」

いつのまにか花組の面々が紅蘭のまわりに集まっていた。

「まあまあ、待ちいや。今見てみるさかい」

紅蘭は封筒を開き、中に入っている便箋を取り出した。

「えー… 李紅蘭様 前略、此度は弊社主催の発明コンテストに御応募戴きまして誠に有難う御座います。厳正なる審査の結果、貴殿の作品は見事一等となりました。お目出度う御座います。つきましては賞状並びに賞金の授与式を執り行ひますので九月十五日に弊社までご足労願ひたいと思ひます。早々 帝都日報社』…い、一等やて？」

「紅蘭すごい！ 一等だよ！」

「紅蘭、おめでとう！」

「すごいじゃねえか、紅蘭」

「いやー、恥ずかしいわあ。あんな発明が一等なんて」

「いや、紅蘭は十分に一等を取れるくらいの実力はあるよ」

「それで、授賞式には出るの？」

「そのつもりや。みんなに言いたいこともあるしな」

「言いたいこと？ それはなんだい？」

「ま、授賞式までのお楽しみ、と言っことや」

（エピソードに続く）

エピソード 太正12年9月15日

帝都・東京を震撼させた連続爆破事件から1週間が過ぎ、事件そのものも人々の話題かに余り上らなくなってきた9月15日、帝都日報社のある部屋。

そこには既に大勢の人間が押しかけており、授賞式の瞬間をいまや遅しと待ち構えていた。

その中に大神と紅蘭の二人がいた。「折角やから大神はんについできて欲しい」と紅蘭が大神に頼み込み、今回二人で帝都日報社にやってきた、という訳である、

「…お待たせいたしました。只今より帝都日報社主催、発明コンテストの表彰式を行ないたいと思いましたが、その前に社長より一言挨拶が御座います」

司会の男が言うと、一人の男が壇上に上がった。

どうやらこの男が社長らしい。

「…えー、皆様ご存じの通り、今回のコンテストの審査員の知人が貞とないのか口で爆発事件を起こすと言う時間が発生いたしました。今回の事件に関し、帝都日報社としても被害に遭われた皆さまに心からお見舞い申し上げます。我々としても今回の事件の影響を考えて、一時はコンテストの開催中止も検討いたしました。読者の皆さまからの激励のお言葉や、審査員の中からもコンテストの続行を求める声が多く、我々としても皆様の声に支えられ、どうか無事開催までこぎつけられましたことを厚くお礼申し上げます。そして社長はこの後コンテスト開催の意義だの、今回のコンテストがきっかけとなって新しい才能が出てきて欲しい、と言ったことを述べると壇上から降りた。

「それでは表彰式に移らせていただきます。今回の発明コンテスト

で一等となりました李紅蘭嬢です」

大勢のストロボの中、紅蘭が壇上にかかる。

「やあやあやあ。どうもどうも」

紅蘭が手を振ってそれに応える。

主催者から紅蘭に賞状が渡されると、その賞状を紅蘭は高々と掲げる。

そして、「金壹阡円」と大書された小切手が彼女に手渡されたとき、一際大きな歓声が挙がった。

「…皆さまご存知の通り、李紅蘭嬢は帝国華撃団・花組の隊員であり、普段は舞台上で活躍する女優でもあります。そして今回の発明コンテストで一等を獲得する、と正に才女と言っ言葉がびったりの女性であります」

その言葉に思わず苦笑する紅蘭。

「それでは紅蘭嬢より何か一言」

そう言われて紅蘭が壇上に立つ。

「えー、皆はんこんにちは」

紅蘭が挨拶をすると控えめな拍手が起こる。

「…ウチが今回の発明コンテストに応募したのは、ウチの実力がどの位のものか試してみたくてやったもんなんで、まさか一等になるとは思わへんかったのでうれしいやら恥ずかしいやらで複雑な気持ちですわ。まあ、人を喜ばせるのはお芝居も発明も同じや思っりますのでこれからも精進して行きたいと思っります」

再び控えめな拍手が起こる。

「あ、どうもどうも。…それともうひとつ。今回賞金の千円の使い道をウチ、色々と考えたんですけど…。全額帝都日報社に寄付したいと思っります」

その言葉にその場にいた全員が「え？」と言っ顔をみる。

「ウチも今回の連続爆破事件について被害に遭われた方の事を考えると心が痛みまして…。ですのでそういつた被害に遭われた方たち

のお見舞いや建物の再建の足しにして欲しい、思いまして。これが一番賞金の有効な使い方や思うんですけど、皆さんどう思います？」
紅蘭の言葉にあちこちから大きな拍手が起こる。

「…どうやら決まりのようやな。では社長はん。このお金、全額寄付させていただきます」

そして紅蘭は帝都日報社社長に今貰ったばかりの小切手を渡した。

*

帰り道。

「…紅蘭、本当によかったのかい？ あんなこと言っちゃって。研究資金がなくなっただんだぞ」

大神が紅蘭に話しかける。

「ええんや。そらウチかて研究資金が欲しくない、言ったら嘘になるわ。でも今回の事件、もしウチがあのコンテストに応募してなかったら、と思うとな…。ある意味、原因はウチにもあるわ」

「原因、って…、気にすることないだろ」

「そらそうやけど…。まあ、ええんや。ほんのちよつとかもしれないけれど、帝都復興の足しになってくれればええんや思うし。それに、ウチはこれがあれば満足や」

と、紅蘭は賞状の入った筒を見せる。

「そうか」

「なあ、大神はん。ウチ、今回の事件でひとつわかったことがあったわ」

「…なんだい？」

「発明や科学言うのは、人の役に立ってこそ初めて役に立つものや、つてな。例えどんなに優れた発明でも、どんなに頭がよくてもそれを悪いことに使ったら、そんなのは本物の発明とは言えへんし、本物の科学やないで」

「…そうだな。紅蘭の言うとおりだ。どんな事だつて一步道を踏み外したら駄目だつて事さ」

「そうやな。よし、ウチはこれからみんなの役に立つような発明

を心がけるで！」

「爆発だけはよしてくれよ」

大神のその言葉に思わず苦笑いをする紅蘭だった。

（おわり）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6727a/>

時計じかけの華撃團

2009年7月2日03時57分発行